22nd 新響

新交響楽団
第22回定期演奏会



THE NEW SYMPHONY ORCHESTRA
22nd Subscription Concert

新交響楽団第22回定期演奏会

指揮　芥川也寸志
Conductor　YASUSHI AKUTAGAWA
フルート独奏　澄川千津
Flute Solo　CHIZU SUMIKAWA

I　交響管弦楽のための音楽……芥川也寸志
Music for Symphony Orchestra……Yasushi Akutagawa

第1楽章　アンダンティーノ
1st mov. Andantino

第2楽章　アレグロ
2nd mov. Allegro

II　フルート協奏曲　第2番　ニ長調　K. 314 ……W. A. モーツァルト
Flute Concerto No. 2 in D major K. 314 …… Wolfgang Amadeus Mozart

第1楽章　アレグロ・アペルト
1st mov. Allegro aperto

第2楽章　アンダンテ・マ・ノン・トロッポ
2nd mov. Andante ma non troppo

第3楽章　アレグロ
3rd mov. Allegro

III　交響曲第1番　ニ長調「巨人」……グスタフ・マーラー
Symphony No. 1 in D major "Titan"……Gustav Mahler

第1楽章　ゆるやかに、ひきずるように　―　一貫してきわめてのどかに
1st mov. Langsam. Schleppend. Wie ein Naturlaut. — Im Anfang sehr gemächlich

第2楽章　力強く、生き生きと
2nd mov. Kräftig bewegt, doch nicht zu schnell

第3楽章　壮重に、威厳をもって、ひきずらぬように
3rd mov. Feierlich und gemessen, ohne zu schleppen

第4楽章　嵐のように、激情をもって
4th mov. Stürmisch bewegt — Energisch

1971年10月28日(木)　午後7時
東京厚生年金会館　大ホール

——音楽監督・常任指揮者——

芥川也寸志

Yasushi Akutagawa

1925年7月　大正文壇の巨匠竜之介の三男として東京に生れる。
1948年　東京音楽学校（現東京芸大）在学中、「交響三章」をN響で初演。カラヤンの注目をうけ欧州楽壇に紹介される。
1953年　クルト・ウェス指揮ニューヨークフィルにより、弦楽のための三楽章「トリプティク」初演。
1954年　団伊玖麿、黛敏郎とともに「三人の会」結成。
1955年　ブルーリボン映画音楽賞受賞。
1966年　第2回日ソ青年友好祭実行委員長。ソ連、中国、欧米、インド、朝鮮、ベトナムを歴訪。
現在　日本作曲家協議会副会長、日本現代音楽協会会員。

＜作品＞交響三章、トリプティク、交響管弦楽のための音楽、交響曲第1番、エローラ交響曲、オスティナート・シンフォニコ、チェロ協奏曲、オーケストラのためのラプソディ。

1956年新響発足以来の常任指揮者であり、1969年音楽監督就任、1968年には合唱団〝鯨〟を組織するなど、アマチュア界に於る貴重な指導者でもある。





——フルート独奏——

澄川千津

Chizu Sumikawa

昭和30年、福岡市に生れる。
4才からピアノ、聴音などをはじめる。
小学校4年から、フルートを林リリ子に師事。
現在、桐朋学園音大付属高校1年在学中。
本年1月には、都市センターホールで、尾高忠明指揮でモツアルトの協奏曲第2番を演奏。
また、10月30日に行なわれるプラハ放送局の少年少女放送コンクールにも、管楽器部門の日本の代表として、スタミッツの協奏曲、バンハルのソナタを吹き込み参加する。

曲目解説

交響管弦楽のための音楽　　芥川也寸志
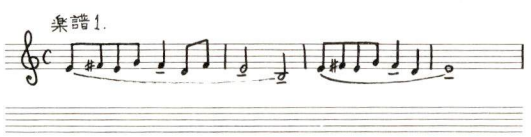
芥川先生の作品を新響が演奏するのは、弦楽のための3楽章の曲「トリプティク」以来久々である。先生の作品の特長（もちろん長所という意味で）は独得の抒情性と、ポリフォニックに書かれた部分（本質的には和声又はリズムとしての処理である場合でも）の極めて有機的な音の広がり、又リズムの面白さや恐らく作者自身の感動による曲の盛上り等が挙げられるであろう。先生の作品は概して極度に急進的ではないが、これから作風が保守的であると判断するのは正しくなく、むしろ作者の知的な自制力或いは芸術上の抑制心のためと考えるべきであろう。抑制心に富んだ作家の作品は　もしもその抑制力が解かれた場合には、こんどはかえって情熱的であるのが普通である。

本日演奏される曲は「トリプティク」と同様先生の若い頃（音楽学校を卒業されて間もない頃）の作品でこの曲も知的で端正な曲である。先生の作品中では、或いは、もっと後で書かれた作品（筆者の聴けた範囲では「エローラ交響曲」「雲の糸」等）の方が個性的かつ内容も多様でよりすばらしいように思うが、前の2曲の方が海外で高い知名度があるという点で共通している。特にこの「交響管弦楽のための音楽」はＮＢＣ交響楽団の後身であるシンフォニー・オブ・ジ・エアーにより 100回も演奏されたそうである。

曲はエキゾチックな情緒をもち音色の魅力に富む第一楽章と、活発で舞曲的な感じの第二楽章より成るが、これは古くからある主要な形式「序奏とアレグロ」であると見ることも出来る。

第一楽章　アンダンティーノ
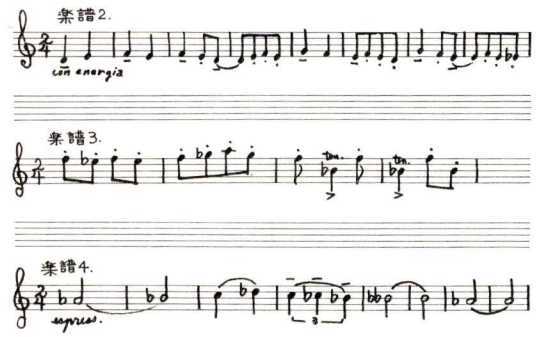
低音部の規則的なリズムに乗ってフルート、オーボエ、クラリネット、トランペット等が東洋風なメロディーを断片的にやりとりする。和音はしばしばホ長調に帰するが、旋律部の複調的或いは全音階的響きや和音の平行的な移行など古典的な解決法はとられていないので、単にホ調と呼ぶのが適当であろう。やがて規則的なリズムがとだえるとイングリッシュホルンにより暗く瞑想的な旋律（楽譜1）が奏される。これは各楽器に受つがれ作曲



者独得の修飾により盛上りを見せた後、アッチェレランドにより再び初めの音型に導びかれる。前にも示された断片的メロディーのやりとりの後冒頭の旋律により楽章が結ばれるが、ここでは半音高いへ長に移されている。

第二楽章　アレグロ

前楽章と対称的に活発でリズミックな楽章。トロンボーンの斉奏によって冒頭に示されるテーマ（楽譜2）木管の奏する後半に半音階の下降をもった旋律（楽譜3）及びヴァイオリンと木管で示される流れるようなメロディー（楽譜4）を主旋律として楽章が構成されている。



終始躍動感にあふれ、「ガィーヌ」や「火の鳥」の一部を思い出させる部分もあるが、全体としてルーマニアの古い舞曲「ホラ」のリズムに近いようである。邦人の作品としては珍らしく変化のあるリズムが主要な役割を果している。

フルート協奏曲　第2番　　モーツァルト

古今の名曲や名旋律の数々は非常に完璧な形をしていて、これに手を加えて少しでも良くしようなどと試みてみても必ず完敗してしまうだろう。これらの音楽はあたかも全く融通の効かない〝真理〟であって、作曲家がその非凡な才能によって、あらゆる雑事に惑わされず、それを掘起したかのようにさえ思えるが、実際には非常に多くの名曲が極めて俗っぽい偶然の事情によって作曲されているのに驚かされる。

それらの事情とは、例えば金銭的事情、たまたまあった作曲の依頼、曲を演奏する人達の編成や腕前の良し悪し、或いは（一番気の効いた場合で）美しい婦人に対する情熱といったところである。

この様な俗事の中から名曲を生み出したという点でモーツァルトの右に出たものはいない。ベートーヴェンにさえ偶然の事情で出来た曲は多いが、彼の場合自分の芸術的欲求に対し俗界の方を従わせようという努力をしばしば行っているのに対し、モーツァルトは俗界の事情にほとんど無抵抗であった。これはモーツァルトの芸術的欲求がベートーヴェンほどには深くなかったからとも考

えられるが、彼の天才は大きな自由よりも作曲上の何らかの制約や困難を好んだようにも思える。

モーツァルトの第二番のフルート協奏曲は、よく知られている通り、もともとはオーボエのための協奏曲であった。これがフルートのために書直されたのは或る裕福なファンからの依頼により、かなり良い条件で、フルートのための3曲の協奏曲と2曲の四重奏曲を作曲することを引受けたためである。依頼主の希望は新曲の書下しであったので、編曲を含んだ作品に対し約束の半額しかモーツァルトに支払われなかったと云われるが、彼が転作を行ったのは作曲の手間を措んだというより、彼一流の機知に富んだ性格のためと考えられるだろう。フルートとオーボエの音域はだいたい似かよっており共に開管である点も共通だが（クラリネットの場合は管内の気柱のでき方が閉管でより低い音が出る代り高低音の急激な往復が難かしい）恐らく伴奏の音色を明るくし、独奏部の音式を多少上げるため原曲のハ長曲がニ長調に変えられている。

管楽器の協奏曲の分野は全くモーツァルトの独壇場の感があり、彼のファゴット、クラリネット、ホルン、フルートとハープ及び5種の管楽器のための協奏曲を書いては皆今日でもそれぞれの分野における最も主要な協奏曲である。しかしこの曲の原曲であるオーボエ協奏曲だけが今日ほとんど演奏されないのは皮肉といえる。

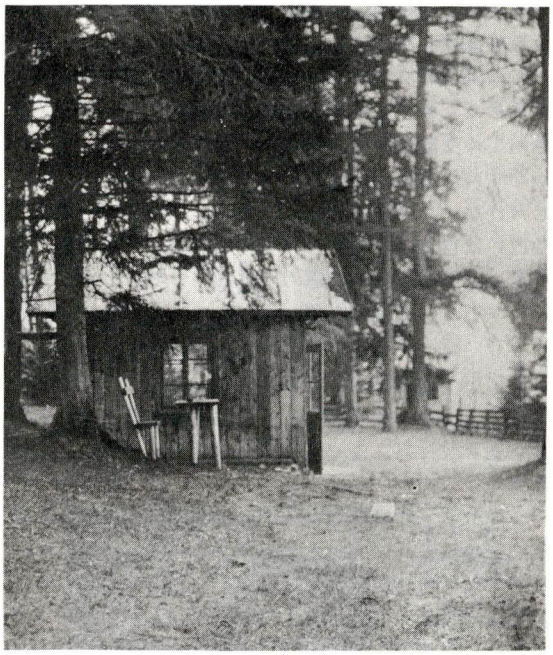
モーツァルトは、当時の楽器の性能が劣っていたためか、フルートの音は嫌いだと父への手紙に書いているが、この協奏曲は独奏部が澄んだ音色で歯切れよく奏されたなら申し分なく美しい曲である。

第一楽章　アレグロ
第二楽章　アンダンテ・マ・ノン・トロッポ
第三楽章　アレグロ

交響曲第1番「巨人」　　マーラー

マーラーの紛れもない力作ー泥臭さと優美なメロディーの交錯、やぼと天才的なひらめきの混淆であるこの交響曲を検討する前に、表題である「巨人」について少し考えてみるのも良いだろう。この言葉は（野球の人気球団の名となっているためかどうか）我々には身近だが、しかし実際には、我々は例えば、赤鬼・青鬼や黄金バットの様には、はっきりとしたイメージを描く事が出来ないことに気が付く。

この曲の場合の〝巨人〟は原題ではタイタン(Titan)となっているが、　れはほとんど普通名詞化しているジャイアントと比べ遙かにギリシャの〝巨神〟のニュアンスが強いと云えるだろう。ギリシャの神話によれば、タイタンは天の神と地の神の間に生れた12人の巨神達で、彼らから更に、天球を肩で支えているアトラスや、人類に火をもたらしたプロメテウス等が生れ出ている。これらの巨神達をも含めギリシャ神話の神々は決して全能ではなく、極めて人間的な感情や欲望に満ちており、ヨーロッパの人達にとってギリシャ神話は教養以前の心の古里であり、登場人物達には我々の想像以上に親近感がもたれていることであろう。元来、巨神の一族を意味していた〝タイタン〟も次第に偉大なもの、優れたものの象徴としての意味をもつようになった。ちなみに、この名はストラディヴァリウス中でも屈指の名器と云われてA．グリュミオーの愛器や処女航海で氷山に衝突して沈んだ英国の豪華客船「タイタニック号」などの名にも見える。



第九を作曲中に住んだチロルの山小屋
（マーラー協会提供）

この交響曲の〝タイタン〟という副題はマラーが同名の小説から霊感を得元曲が書かれたため、作曲者自身名づけたものであるが、マーラーの意図した偉大さへの象徴的な意味と異り「巨人」そのものの印象を与えがちなため、マーラー自身は後にこの題名の撤回を望んだという。尚、「巨人族」はヨーロッパのもう一つの主要な神話である北欧の神話の中でも重要な役割を果しているが、ワーグナーの畢生の大作である「ニーベルンゲンの指環」四部作はこの北欧の神話の方を素材としている。

曲目解説

マーラーがこの第一交響曲（初めは「交響詩」と称された）を完成したのは彼が28才の1888年で、当時作曲家としての名声はなく、むしろ、指揮者として盛名があり多忙であったため、完成には5年を費したと云われる。彼の始めての交響曲ではあったが、それ迄に歌曲、オペラ等かなりの作曲経験を経ているので技術的な不安は全く感じられない。曲中の旋律は多くが割と平易なものか、民謡或いは自分の歌曲からの転用であるが、対立的な旋律の扱いや旋律の修飾が極めて多彩かつ巧みであるため常に生々とした表情や音色が保たれている。又、管弦楽法の新しい試みが随所に見られ様々の奏法を駆使して演奏上の指示もこと細かに与えられているが、マーラーの場合はベルリオーズの様に新しい管弦楽法のデモンストレーションを行おうという意図はなく彼の霊感の必然的な欲求なのであろう。

マーラーは一般にヴァーグナーの系列の作曲家と云われ、非常にしばしばブルックナーと共に扱われる。マーラーはワーグナーの熱烈な信奉者であったしブルックナーの最良の教師、友人として尊敬していたが、ブルックナーが、独得のオルガン的響きを別にすれば、ワーグナーの巨大な影響力から脱し切っておらず敵対者であったブラームス音楽とも共通性が多いのに比し、マーラーの音楽の方が遙かに音色・表情の変化に富み個性的かつ色彩的である。

マーラーはR．シュトラウスと同様永い間作曲家としてよりも指揮者として知られていたが、この曲中で最も新しい感覚で書かれた第4楽章はシュトラウスの「ドン・ファン」を彷彿とさせる箇所が随所にある。この二つの曲はほゞ同時に書上げられ、当時マーラーとシュトラウスはお互いを優れた作曲家と認めた数少ない理解者の一人であった。

マーラーの管弦楽曲は9つの交響曲を始めとしていずれも大規模なものであるが、この様な面にはワーグナー等の精神的な影響がうかがえる。マーラーは若い頃には同級生のヴォルフ等と供に歌曲の作品に専念していたので、交響曲にも歌唱を含むものが多く又旋律も歌謡的である。

マーラーの後半生の作品はほとんど交響曲であるが、彼の様に常に新しい試みを行っていた作家にとって管弦楽曲は最大に魅力であったろう。我々は、作曲家にとっての喜こびは自分の楽想通りの音をオーケストラからとり出せる事であると考えがちだが、実際には作曲家が予期した程効果が上らない場合もあれば逆に予期以上の効果が上る場合もあるだろう。むしろこのような未知の要素の大きい事こそ作曲家にとっての管弦楽曲の魅力とも考えられるだろう。特に編成が大きく新しい試みである程その効果は未知の筈である。

マーラーが9曲の交響曲を完成し、第10曲目の作曲半ばにして逝ったことについては有名な因縁話がある。ベートーヴェン・ブルックナーが9つの交響曲を残して他界している事にこだわった彼は、初め第9交響曲の予定で完成した曲をわざわざ「大地の歌」と称して発表した。後にはこのジンクスを否定し別に第9番の交響曲を完成したが、結局第10番は完成を見ずに終った。しかし、マーラーがこの様に迷信深くなったことは、彼が「亡き児を偲ぶ歌」を書上げて間もなく生れたばかりの次女を失い、更に数年後長女をも失っている事を考え合せると、充分理解出来ることである。

第一楽章「ゆるやかに重々しく」……朝の静けさを表わす神秘的な出だし。やがてカッコーの鳴声が聴える。この4度の音程は全曲を通じてのモティーフである。完全音程の重要な役割はベートーヴェンの〝第9〟の一楽章にも見られるが、後のバルトークの音楽においては殊更顕著である。序奏部は低弦の不気味な上昇音形に導かれ、カッコーのモティーフの橋渡しにより主部の第一主題へ受つがれる。第一楽章は音楽の淀みない流れ、色彩的な管弦楽法等新鮮で洗練された感覚で書かれている。

第二楽章「力強い動きをもって」……ひなびて泥臭いスケルツォである。途中からヨーデル風の旋律も加わる。テンポは従来のスケルツォよりワルツに近く、時に、優雅なトリオの部分はワルツの前身であるレントラーであると見做されている。

第三楽章「荘重に、威厳をもって、しかし緩慢でなく」……独奏コントラバスの名高い難所？ティンパニーの4度のリズムはマーラーの意図に反し巨人の歩みを想わせる。主旋律はいささか野暮ったいカノンとなりこれにオーボエの鋭い音型も加わるがこれは主旋律の〝活用語尾〟と見做される。カノンが終ると管に甘美なメロディーが現れる。ここではテンポの緩急和音の明暗の唐突な変化が著るしい効果を上げている。

第四楽章「嵐のように、動きをもって」…テュッティーの強奏に始まり、金管のドラマティックな旋律を軸とした高揚部が永く続いた後、弦の優美なメロディーにより曲はロマンティックに盛上る。この後再び緊張と高まりを見せ、一楽章の序奏が回顧される。4楽章の主題は再度展開され、終結部では序奏の4度の動機を長調に転じたメロディーを金管が高らかに奏する。弦の主和音に乗った管の咆哮の後、2つの短い音で曲が結ばれる。

（菱沼佳史　Vla）

マーラー讃

平野耕一

最近グスタフ・マーラーに関して大変話題になった映画が上映されたのを御存じですか？　そう、それはノーベル賞を受けた文豪トーマスマンの有名な小説〝Death in Venice〟を映画化した〝ベニスに死す〟です。美しいイタリアの水の都ベニスを背景にくりひろげられる中年の男アッシェンバッハと美目秀麗な一人の少年との特異な〝愛〟のストーリーの主人公アッシェンバッハのモデルが実はG・マーラーであるかのように伝っていますが、それは全くの間違いなのだそうです。此の小説は十数年来の親しい間柄にあったトーマスマンがベニスで新しい小説の題材を考えていた時、G・マーラー死去の報を聞いて大変な心理的ショックを受け、その小説の主人公にマーラーの視覚的性格的イメージを移して描いただけでストーリー自体は全くG・マーラーとは関係ないのが真相だそうです。只G・マーラーを知る人々がこの小説を読んであゝこれはマーラーを主人公にしたものに相違ないと思うことはあり得たわけと思われます。

私がこの話を聞いたのは現在武蔵野音楽大学で86才の高令にもかゝわらず毎日元気に教鞭をとられているクラウス・スプリングスハイム氏からですが、氏はG・マーラーに直接教えを受けた人で又文豪トーマス・マンの義弟にも当る人です。私は又スイスのチューリッヒ湖畔で静かに余生を送っておられるトーマス・マン夫人を訪ねた際やはりG・マーラーの話を聞きましたがこの二人の話を綜合するとG・マーラーの人柄がいろいろとよく判って大変興味深いものでした。彼は音楽の仕事をしている時は大変に厳しい人で全く妥協の余地のない性格だったそうですが仕事以外の時はそれとは正反対にリラックスな、そして親切で思いやりのある人間味あふれる人だったそうです。或る時プリングスハイム氏がG・マーラーとステーツオペラでオペラを見ての帰路G・マーラーが突然奥さんに頼まれたクッキーを買忘れたのを思い出して冬の雪の中を夜おそく深しまわって手に入れた話。そして大きなクッキーをかゝえて店を出て来たG・マーラーにプリングスハイム教授が〝それをお持ちしましょう〟といった所、G・マーラーは笑って〝御好意は有難いがもし元を君が持って万一雪道ですべって箱をよごしたら君はず一っとその事を気にするに違いない。しかし私ならば気にしないですむからやはり私が持って行くよ〟と言った話etc.いづれも温い人間味が充分にうかゞえると思います。

このプリングハイム氏がオーストリアのウィーンに本部を持つ国際グスタフマーラー協会のラッツ博士の依頼により、オーストリア大使館の協力を得て近衛秀麿、山根銀二、属啓成、山田一男諸氏等と日本に日本グスタフマーラー協会を作ったのは昭和３５年でそれは丁度マーラー生誕百年に当る年でした。この協会の目的は会員の間に、又その会員を通じてG・マーラーの作品に対する興味と理解を広め且つ深める事。そしてその使命はマーラーの作品に関する講演と演奏の催し、ことに彼のリードのそれを通じて、又可能性に従って日刊新聞や専問雑誌の上で啓蒙的な労作をすることで前記の目的に奉仕し、マーラーの交響曲の公開演奏の催しを効果的に促進することにあります。協会設立の初年度においては前記のように生誕百年祭の世界的行事の一つとして東京でも協会主催の音楽会が山田夏精指揮、東京フィルハーモニー交響楽団の演奏、それに伊藤京子、佐々木成子、石井昭彦、宮原卓也諸氏等のソリストを迎えて７月７日、日比谷公会堂で催されました。この時のプログラムは1. さすらう若人の歌。2. 交響曲第４番。3. 歌曲集〝子供の不思議な角笛より〟。4. 歌曲集〝最後の七つの歌より、などでした。同じ年にマーラー作品による四回のレコードコンサートが藁科雅美氏を解説者として催されました。次の年は丁度G・マーラー没後五十年に当ったので協会では新らしく種々の企画を立案しました。所がこゝで協会は難関にぶっかってしまったのです。その一つは名誉会長であり

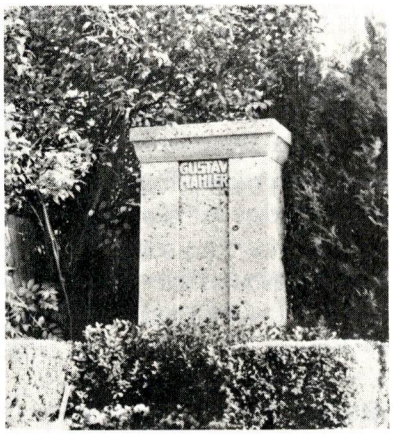


又協会最大のスポンサーでもあった当時の朝日ビール社長、山本為三郎氏の死去であり他の一つは予定していたオーケストラからの難しい注文だったのです。その注文とは協会の予算では演奏が出来ないから予算を増額して欲しいという事他のもう一つは難解な曲なので練習時間が規定の時間では不充分なのでそれをふやして欲しいし、その為にリハーサル料も必然的に余計に払って欲しいという事でした。当時スポンサーを失った協会はそうした経済的理由から涙をのんで大きな催しを中止しました。その後は講演会や歌曲の夕べなどの協賛を行い又各方面に各種の資料を提供して来ましたがこゝ数年は全く活動を行って居りません。

協会の事務局になっている私の所には毎年マーラー協会の最近の活動状況や入会方法の問合せが月に十数通必ず来るのですがそうした方々の層を見るとそれが皆高校2,３年生なのは不思議です。２年程前に或る高校生から電

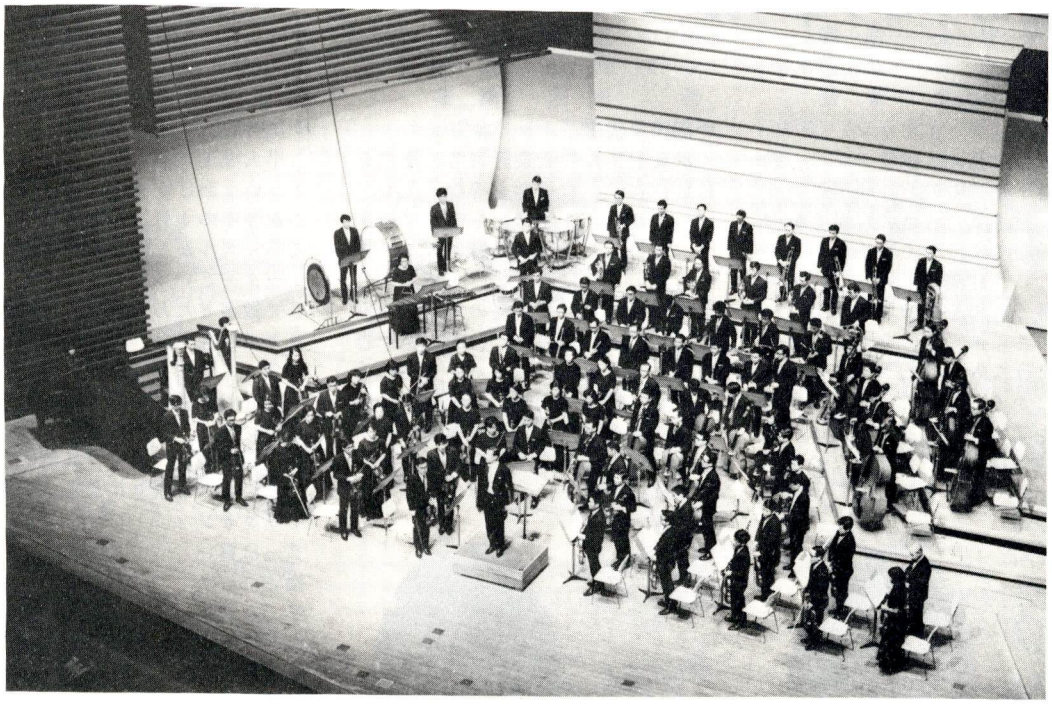
話があった時に現在協会では全く活動していないと言うと〝それでは私共に支部を作る許可を下さい〟といわれました。そこで〝何人位集まりますか〟と聞きますと〝現在30人ですが５０人位は簡単に集められます〟との事なのでそれでは〝資料その他を送りますから〟と住所を聞いた所なんとそれが京都なのです。その高校生は一ケ月の間前後６回毎回15～20分位電話をかけて来ていましたのでその熱心さを言った所〝私より熱心なのが未だ29名も居ます〟との事でした。そうマーラーの作品は本当に不思議な魅力を持っているようです。特に専門的な音楽知識、理論とか作曲技法などを知らない一般音楽愛好家にとって最初に音楽会でG・マーラーの交響曲を聞いた感想を聞くとその大部分の人がなんと〝つまらない〟とか〝眠くなるようにたいくつだ〟と言います。しかし２度３度と聞くにつれ、又音楽的知識が高まるにつれ、魔薬のような妖しい魅力を持って人々を引つけ、やがては熱狂的なファンにしてしまう何かをG・マーラーの作品は持っているのです。

国際グスタフ・マーラー協会ウィーン本部の会長でもあり又マーラーの研究家としても知られているエルウイン・ラッツ博士の『グスタフ・マーラー』の中から彼の作品を考える上に役立つ短い章を二，三御紹介しましょう。「マーラーも表現の手段を選択する際ワグナー以前の時代に迄逆ろうとしたり、又最後迄調性を固執したりしはしたが、それにも拘らず彼はこういう発展に決定的な功献をなした。一切の装飾的の添加を排除して唯音楽的構成の明瞭化だけに努めようとした彼の楽器編成法の透明さや、表現の集中、多くの線形の硬さなどは〝ウイーン流〟派発展の前提をなすものであった……」「灼熱の理想家であったマーラーはしばしは彼自身の幻想から深い感動を受け、そして真先きに感嘯を受けているものに救済的なものを対立させようと試みた。彼の第二交響曲の場合がその例であるが特にその後の第八の場合は顕著であった。最も深い、神秘的な経験を芸術的に表現する事、密接な自然えの結合、妥協のない真実さ及び厚い宗教心、元らがG・マーラー及びその作品の個性としての重要な特色である。」「マーラーの音楽という言葉は、早くも彼の初期の諸作品中に見落す事の出来ない特色を示している。即ち民族的の旋律法、行進曲風の節奏法、長調と短調との特色ある混合、繋留音の作出及びその他の、マーラー独特の和声的の結合、教会旋法的（例えばフリギア式の）変転及びその他の多数の特色がそれである。たまたまマーラーは新しいことを表現しなければならなかったので、そしてそれには新しい形式が必要であったので、音楽という言葉はあらゆる含蓄を持たせながらできるだけ単純にして置かなければならなかった。彼の音楽が内部関係の点で豊かであるのは主題及び楽想の取扱い方ならびに変奏についての技術が高度に発達した為であるがその技術も又、もし平明さを失わせまいとする場合には主題になる材料が比較的に単純であることを要求した……」etc ……（以上ラッツ博士のもの）全体的に見て彼の作品を単的に表現すれば、例えばシュトラウスなどと比較するとシュトラウスの作品は一般的にアールするけれど、マーラーのそれより倫理的なサイドピと哲学的な平面さを持っていると言えます。従って最初は退くつであるが聞く回数を経るに従ってより魅力を感じるという秘密は意外と、例えば哲学と聞くだけで頭が痛くなるがいざ取りつくとより深く奥を究めたくなるのと同じような、そんな所にあるのかも知れません。



さて今度芥川也寸志氏指揮の新交響楽団の皆さんがマーラーの交響曲第一番〝巨人〟を演奏されると聞いて真先に考えたことは新響のメンバーは皆さん他に職業をお持ちの方が殆んどなのに充分な練習時間がとれるだろうかということ。二番目に私の経験からいって事務局の方々は切符を売るのに苦労されるだろうなという事です。プロフェッショナルなオーケストラでも毛嫌いする曲を取上られるのは逆に新響がアマチュアオーケストラだから、芸術的意欲が何よりも優先するからなどといろいろ考えられない事もありませんがしかし現実問題としてこうした考えはあまりにも皮相的であることは否定出来ません。実際はとても大変な＝それはすべての意味で＝事であると思います。先にアマチュアオーケストラと書きましたがこの言葉は時として水準の低さを連想させますがしかし新響の演奏に関しては私達仲間＝私達は英字新聞や海外音楽雑誌などに定期的に批評や論文を発表している外人評論家で日本音楽舞踊批評家クラブというのを作っていますが＝の間では大変良いという定評があるのです。勿論、私達が新響の事を知ったのはごく最近の事なのですが……。しかし本年八月十日のサマーコンサートで私達仲間が聞いたリムスキーコルサコフの交響組曲シェラザードは特に深い感銘を受け、普断アマチュアと名づけられる演奏団体の批評は取り上げない習慣なのに、この時は英文毎日その他に非常に良い批評が載りました。この新響ならきっと立派なマーラーを聞かせてくれるに違いないという大きな期待を持って私は10月28日を楽しみにしているのです。

（筆者＝マーラー協会理事、音楽評論家）



新　交　響　楽　団

新交響楽団、新響は名前こそN響の前身の名前と同じですが、純然たるアマチュアのオーケストラで、サラリーマン、学生、主婦など音楽を職業としない 120名の団員から成り、月々 400円の団費と演奏会の収入による独立採算で運営されています。

42年秋のソ連旅行、44年秋の沖縄九州旅行という華やかな活動がある反面、実質的には何の拘束もない任意団体で、週1回2時間半の練習では、全員が常に出席という訳にも行きませんから、極端に言えば常に解体の危機に瀕しています。私達を結びつけるものは一諸にアンサンブルを創るという一点にしかありません。2～3回の練習で演奏会をもつというプロのオーケストラにはできないような、すみずみまで奏きこんだ演奏をモットーとし、毎週の練習自体をも一つの目的とする緊張と充実が団員の共通目標になっています。

新響のもう一つの目的は、オーケストラを団員の自己満足としてでなく、なるべく沢山の人々に演奏を聴いてもらいたいという、演奏団体としての活動です。

今年から新たに若手指揮者のホープ小林研一郎氏を指揮者として正式にお願いし、芥川先生とタクトを分担して頂くことになり、外部からの依頼に応じられる演奏団体としての体制をととのえつつあります。

本日以降の活動は、11月7日第九の依頼演奏、12月15日と17日合唱団鯨との第九、2月7には黒沼ゆり子さんとの協演、4月2日には23回定期演奏会で幻想交響曲を、そして6月6日には合唱団鯨とブルックナーの合唱の大曲を演奏する予定になっています。

最近の主な活動

1970年

12月21，23日　第九特別演奏会　　共立講堂

弦楽のためのアダージォ＝バーバー、交響曲第9番「合唱付」＝ベートーベン　　合唱団：唱団“鯨”
独唱：佐野順子、菊池洋子、金谷良三、田島好一

1971年

1月15日　足立区成人式祝典演奏会　　足立区文化会館

交響曲第8番「未完成」＝シューベルト、交響曲第5番「運命」＝ベートーベン

4月22日　第21回定期演奏会　　虎ノ門ホール

管弦楽組曲第3番＝バッハ、バイオリン協奏曲＝ベートーベン、独奏：徳永二男、交響曲第3番＝ブラームス　同プロ **4月18日　　千葉県文化会館**

7月1日　合唱団鯨演奏会に出演　　渋谷公会館

弦楽のためのレクイエム＝武満　徹、レクイエムニフォーレ　　指揮：小林研一郎
レクイエム＝モーツァルト

8月10日　サマーコンサート　　東京文化会館

旧友＝タイケ、結婚行進曲＝メンデルスゾーン、軍隊行進曲＝シューベルト、くるみ割人形から行進曲＝チャイコフスキー、威風堂々＝エルガー（指揮：芥川）
青少年の管弦楽入門＝ブリテン（指揮：小林研一郎）
シェーラザーデ＝R. コルサコフ（指揮：芥川也寸志）

8月20日　3Mクラブコンサート　　郵便貯金ホール

上記ブリテンの代りに交響曲8番「未完成」＝シューベルト

（指揮は特記以外全て芥川也寸志）

新響・“鯨”第九特別演奏会

日　時　12月15日(水)、17日(金)　午後7時開演
会　場　日　比　谷　公　会　堂
曲　目　パッサカリアとフーガ　ハ短調……バッハ＝ストコフスキー
交響曲第9番　ニ短調　Op. 125「合唱付」……L. V. ベートーベン
演　奏　指揮：芥川也寸志　管弦楽：新交響楽団　合唱：合唱団“鯨”
独唱　大川隆子(Sop)　秋葉京子(Alt)　金谷良三(Ten)　田島好一(Bar)
入場料　S：700円　A：500円　B：300円（全席指定）　▷都内プレイガイドにて前売中

新響・新春特別演奏会

日　時　1972年2月7日(月)　午後7時
会　場　日　比　谷　公　会　堂
曲　目　パッサカリアとフーガ　ハ短調……バッハ＝ストコフスキー
ヴァイオリン協奏曲　ホ短調　……メンデルスゾーン
交響曲第1番　ニ短調　「巨人」……マーラー
演　奏　指揮：芥川也寸志　ヴァイオリン独奏：黒沼ゆり子　管弦楽：新交響楽団
入場料　未　定
主　催　(株)総合文化社　後　援　東京放送

新響・第23回定期演奏会

日　時　1972年4月2日(日)　午後6時半
会　場　東京文化会館大ホール
曲　目　交響曲第36番　ハ長調「リンツ」　K.425 ……モーツァルト
ピアノ協奏曲　第4番　作品58……ベートーベン
幻想交響曲　作品14……ベルリオーズ
演　奏　指揮：小林研一郎　ピアノ独奏：未定　管弦楽：新交響楽団
入場料　S：700円　A：500円　B：300円　(全席指定)

新響・登録会員募集中

＜新響の演奏を聴いてください＞

□新響の演奏会の御案内を毎回お送りします。
□入場券は一割引させて頂きます。
□会員証を提示して頂けばプログラムは無料でさしあげます。

申込みは、〒160　新宿区須賀町14 大湊ビル　新交響楽団宛　ハガキにて　郵便番号、住所、氏名(フリガナ)、生年月日、ご職業、もしありましたらご所属の音楽団体、楽器をやられる方は楽器名を付記してください。